

[各種報告]

海外協定大学間共同研究及び学生交流の活性化に関する検討
－海外協定校(韓国)共同研究プログラムの報告－

鄭 英美*

Examination about activation of joint research and student
exchange between overseas agreement universities
-Report of Joint Research Program in Overseas
Collaborated Schools (Korea)-

Youngmi JUNG*

Abstract

This research has three objectives (activation of joint research between Japan-Korea students and teachers, friendship exchange between athletic clubs, expansion of Japan-Korea agreement schools) in order to train and strengthen human resources capable of responding to the 21st century global society. We set up and actually conducted exchanges between Japan and Korea and four universities in Korea. In addition to Daegu University in Korea, we were able to realize six exchanges between Japan and Korea, and four universities a year in 2018. As a result, as well as joint research among teachers and academic seminars among students, we were able to realize all the exchanges between athletic clubs. Although expansion of the affiliated schools has not been realized yet, with non-affiliated schools that carried out international exchange last year, we are considering while promoting international exchange and joint research on an ongoing basis. The main result of this exchange was that the participating students came to understand the culture of foreign countries through international exchange, and realized the importance of language for globalization, the acquisition and perspective of an international sense. In addition, I could make friends from foreign countries and gain the ability to communicate with them. Future tasks will be to study languages in advance, study the culture and history of the other country, and finally build a system where more students can participate.

KEY WORDS : International exchange, Japan-Korea joint research, university student international exchange

1. はじめに

近年、世界は急速にしかも大きく変化し続けている。ついに、世界は1つの市場経済圏になり、IT技術の進化とともにインターネットで世界中がつながっている。まさに指一本で世界をつなげることが可能になっている。このようなグローバル化に伴い、世界はグローバル社会に対応できる人材「人財」獲得と育成の競争の様相を呈している。グローバル時代の社会に価値を創造するのは、結局一人ひとりの人間である(黒川, 2011)¹⁾。この多彩な人材が多様な分野で的確かつ機動的に組織をつくり、国際情勢にスピード感を持って、世界の中の日本を動かしていく。

OECD(経済協力開発機構)の『The Definition and Selection of KEY COMPETENCIES:Theoretical & Conceptual Foundation』=DeSeCoプロジェクトを通して21世紀を生きるために必要とされる資質や能力(KEY COMPETENCIES)について次のように提示した(OECD,2006)⁵⁾。

一つ目は、「社会的に異質な集団での交流する能力」多元的で多文化的な社会において、また異なった文化、利害、価値観、信念をもつ世界において、個人が多様な背景をもった人々で構成される集団や社会秩序にくわわり、その中でうまく機能し、差異や矛盾に対処する必要がある。二つ目は、「自立的に行動する能力」自立とは孤独のことではなく、むしろ周囲の環境や社会的な動き、自らが果たし果たそうとしている役割を認識することであり、責任と思慮深さをもって行動することである。自立的に行動することは、社会の発展に効果的に参加するためだけではなく、職場や家庭や社会生活など人生の様々な側面をうまくこなしていくうえでも必要である。三つ目は、「社会・文化的、技術的ツールを相互作用的に活用する能力」「道具」という言葉を最も広い意味で使っている。モノとしての道具も社会・文化的なツールとしての道具も含まれる。グローバル経済と現代社会の社会的、専門的な要求は、機械やコンピュータなどのモノとしてのツールだけでなく、言語・情報・知識のような社会文化的な道具を活用することに熟練することが必要としている。「道具」は単なる受動的な媒介物ではなく、「個人と環境との能動的な対話」に欠かせない部分であり、文字通り人間の心身を拡張したものである(Wikipedia, 2017)。

これらの資質や能力を身に着けた一人の人間が世界に与える影響や社会的価値はまさに大きい。これから

の社会を背負って未来を担う、人材・人財に育成・輩出を第1の目的にしている高等教育機関、大学では、複雑で予測の難しい社会に必要な資質・能力をどのように育成していくかが課題となっている。多くの大学でいつよりも国際化・グローバル化の推進が求められていることも結局、DeSeCoプロジェクトから出された21世紀が必要とする能力(KEY COMPETENCIES)を獲得させるためであろう。

また、日本のスポーツ庁においても『現在、国連において「スポーツを通じた平和と開発」というテーマで議論が進められ、ユネスコの体育スポーツ担当大臣等国際会議(MINEPS)のベルリン宣言にて「万人の権利としてのスポーツ」について言及されているように、スポーツによる国際交流や国際的な社会発展・経済発展に及ぼす効果・可能性等は国際的な関心を集めつつあります。我が国としてもこうした世界的な潮流のもと、スポーツによる国際交流を通じてスポーツのもつ価値の共有をはかり、日本の国際的な地位の向上を目指します(スポーツ庁 2019)。』²⁾

わが大学においても21世紀グローバル社会に対応できる人材の養成と強化のために国境を越え、外国との交流の必要性和効果について認識し、周辺国であるアジア圏の韓国・中国をはじめ、数多くの海外の大学と協定締結を結んでいる。しかし、実際の国際交流状況や実績からすると十分な効果が得られた(日韓の協定大学間の交流の状況から)とは言えない状況であった。

そこで本研究(国際交流活動)では、協定締結当初の意図や目的であった、教員間共同研究や学術セミナーはもちろん、学生同士の学術・スポーツ交流が活発にできるような環境を作ることである。そのため本研究には、大きく3つの目的を設定している。一つ目は、海外協定大学の教員間共同研究及び学術セミナーの開催(教員間共同研究活性化)。二つ目は、日・韓学生同士の学術セミナー及び運動部同士の親善交流拡大(学生同士の交流の活性化)。三つ目は、海外友好大学間協定拡大(日・韓協定校の拡大)である。これらの目的達成のためには、国際交流に関心と熱意、必要性に深く認識している教員が中心となって実際に教員間の日韓共同研究や学生同士の学術・スポーツ・文化交流会を実施し、その経験やネットワークを生かした国際交流活性化方を提案する。

II. 方法及び実施概要

1. 国際交流方法および交流内容

- ▶交流方法：日・韓の大学の教員及び学生がお互いの国を訪問し、様々な(学術・スポーツ・文化)交流を行う相互交流方式(毎年:派遣,受け入れ)
- ▶交流内容：学術セミナー, 研究論文発表(卒論含む), 自由討論, 学食体験, スポーツ大会, 施設見学, 親睦交流会
- ▶アンケート調査:交流に参加した学生を対象に「国際交流に対するの任氏についての調査」調査項目は, ①国際交流参加の効果, ②受け入れ開催の際, 困ったこと, ③派遣参加の際, 困ったこと, ④国際交流での期待(希望), ⑤今後の課題の5つの項目でアンケート調査を実施した.

2. 国際交流対象

- ▶日本：九州共立大学
- ▶韓国：(協定校2校) 韓国大邱大学, 韓国東西大学(共同研究の実施)
(非協定校3校) 韓国教員大学, 韓国仁済大学, 韓国朝鮮大学

3. 国際実施日程(開催地, 参加者, 交流内容)

- ▶実施回数：受け入れ交流実施 3回, 訪問交流参加 3回 計：6回実施
- ▶国際交流参加者数：日本:135名, 韓国:124名 計:259名(複数) 実際に実施した6回の日・韓国国際交流の日程と参加人数は, <Table1>と<Table 2>のようである.

Table1. 国際実施日程(開催地, 参加者, 交流内容)

実施方式	回	対象校	日程及び参加者数(日韓参加者全て:複数)
受け入れ 交流実施	1	韓国教員大学	2018/06/09(土)-10(日)(日:25名, 韓:7名)
	2	韓国仁済大学	2018/06/30(土)-7/01(日)(日:30名, 韓:9名)
	3	韓国大邱大学	2018/11/30(金)-12/01(土)(日:31名, 韓:19名)
訪問 交流参加	1	韓国朝鮮大学	2019/02/18(月)-21(木)(日:17名, 韓:28名)
	2	韓国仁済大学	2019/03/10(日)-03/12(火)(日:16名, 韓:27名)
	3	韓国大邱大学	2019/03/13(水)-03/15(金)(日:16名, 韓:34名)

Table2. 国際交流実際のタイムスケジュール(その他の交流会共にほぼ同じ内容)

日	時間	交流内容	
6/30(土)	09:00-09:30	九州共立大学 到着, 打ち合わせ	両大
	10:00-10:30	開会式及び参加者の紹介	両大共に
	10:35-12:20	学術セミナー(日・韓学術研究発表) 自由討論	両大の学生
	12:30-13:30	昼食(学食体験) アンケート調査(卒論など研究用)	参加者全員
	14:00-17:30	日・韓スポーツ大会(3種目以上)	両大の学生
	18:00-20:00	両大学相互交流活動, 懇親会など	親睦会
7/1(日)	0900-12:00	九州共立大学施設見学, 地域・スポーツ施設の見学	施設(教員案内)

III. 国際交流活動の状況

日・韓国国際交流の内容としては, 参加大学の特性・状況・参加人数などによって多少の差はあったが基本的には「学術セミナー(研究論文発表:共立大の学生は主に卒業論文), 自由討論, 学食体験, スポーツ大会, 施設見学, 親睦交流会, アンケート調査」を中心に行われた.

1) 学生による学術セミナー, 研究論文発表などの実施状況と成果

交流に参加する学生と教員が事前に研究発表資料を準備し発表を行った. 学生は, 卒業論文の中間発表の形式で発表をし, 実際に卒業論文にまで発展させた. <Table3>と<Fig1>は, 国際交流の学術セミナーで実際に発表された研究テーマと卒業論文のテーマと学術セミナーを行っている風景である.

1. 日・韓国国際交流活動の実施状況及び成果

Table3. 学術セミナー，研究発表テーマと実際の卒業論文のテーマ

学生による学術セミナー，研究論文発表などの実施状況と成果	
①	日韓のスポーツ大学に通う学生のプロバレーボールに対するイメージ調査：(内山，大山，宗根) (九州共立大)
②	日韓スポーツクラブの状況： PARK SUN HOO
③	体育授業に対する意識と大学生の豊かなスポーツライフに関する研究：井上匠 (九州共立大)
④	スポーツ用品の流通構造の日韓比較：PART MOON SOO
⑤	部活動における顧問指導者の指導態度が生徒の参加意欲に与える影響：石田尚希，川本大樹 (九州共立大)
⑥	スポーツ用品市場の日韓比較：PARK JUN HO
⑦	教員の授業方法における生徒の授業参加への態度：田口大輔，吉田尚央 (九州共立大)
⑧	日本と韓国の中学校学習指導要領におけるダンス教育カリキュラムの違いーコミュニケーション能力との関係を中心にー：松清 愛美，角田 愛 (九州共立大)
⑨	日本と韓国の教育養成課程 (保健体育) の違いについて：牟田充希，溝邊雅大 (九州共立大)
⑩	児童期における運動能力とコミュニケーション力の関係性：菊池竜也 (九州共立大)
⑪	高齢者の日常生活における定期的な運動実施がクオリティーオブライフに及ぼす：松尾 直哉 (九州共立大)
学生における卒業論文の作成状況 (国際関連テーマ)	
①	日・韓のスポーツ大学生におけるバレーボールに対するイメージ調査 (30年度)
②	日本と韓国の中学校学習指導要領におけるダンス分野についての内容分析 (30年度)
③	日・韓の中学校・高等学校体育科の教育課程及び教員養成課程の違い (30年度)
④	日本と韓国の大学生のプロ野球に対するイメージ調査 (29年度)
⑤	日・韓体育大における進路選択に対する研究 (29年度)
⑥	日・韓大学生におけるスポーツ国際交流に対する認識調査 (29年度) (韓国側の調査の際に大邱大学，東西大学，朝鮮大学などの教員に協力していただいた.)

<Table3>で示された，九州共立大の学生は，卒業論文の中間発表の形式で発表を進めた。

<Table3>の下段の‘卒業論文の作成状況’で示

されたように日・韓国際交流を活用して実際に卒業論文にまで発展させた。H29年とH30年度共に3編，合わせて6編の卒業論文を完成させた。





Fig1. 学術セミナーの風景 (受け入れ開催, 日本)

<Fig1>と<Fig2>は、日本(受け入れ)と、韓国(派遣参加)交流で実施した学術セミナー(研究発表)、自由討論の様子である。それぞれの交流会での発表の内容、また自由討論のテーマは、<Table3>

の上端に示されたように学生達が進行中であった卒業論文など、学生達が自ら選択したテーマを基に発表資料を作成し、発表内容が正確に伝わるように事前に相手国の言葉に訳されたスライドで行われた。



Fig2. 学術セミナーの風景

2) 教員による共同研究実施内容と成果

教員は、教員間の交流、または共同研究活動では、学生たちの日・韓交流の活動の際に引率同行を基本としながら、オン・オフラインで連絡を取り合いながら共同研究を進めた。その結果は、両国の学会にでも参加できるような体制を作り活発な学会活動を行った。

両国の教員同士が共同で研究している内容や各分野について自由に発表、国内・外の学会に参加し、進んでは、学会誌への投稿までつなげた。〈Table4〉と〈Fig3〉は、日韓教員同士の共同研究内容と活動風景である。

Table4. 教員による共同研究実施内容と成果

教員による共同研究実施内容と成果	
1. 学会参加回数及び人数（日・韓の教員共同参加）	
①	5月：韓国開催，韓国発育発達学会（参加者：青山優子，鄭英美の他韓国側の朝鮮大学，大邱大学の学者）
②	9月：熊本開催，九州体育スポーツ学会（参加者：青山優子，鄭英美，Seo young-hwanの他韓国側の朝鮮大学，大邱大学，済州大学などの学者5-6名）
③	10月：韓国開催，2018, The 99th National Sports Festival Commemoration The 56th Korea Physical Education Association Conference and the 30th International Sports Science Conference（参加者：青山優子，鄭英美，木寺英史の他韓国側の朝鮮大学，大邱大学の学者）
2. 投稿論文（日・韓の教員共同研究物）	
①	韓日体育専攻大学生のスポーツ国際交流認識についての調査研究（査読あり），九州共立大学・朝鮮大学
②	日本の運動部活の成立過程と教育的効果及び満足度調査（査読あり）九州共立大学・朝鮮大学
③	幼稚園児の唾液α-アミラーゼ活性と運動能力との関係（査読あり）九州共立大学，韓国学会誌
3. 学会発表回数（日・韓の教員共同研究物）	
①	「対話型保育」を介して発現されている乳幼児の主体意識と想像力 - 1歳から可能な「身体表現遊び」を中心に（九州共立大学・朝鮮大学）
②	日本の学校運動部活動の定着過程と教育的効果と満足度の分析（九州共立大学・朝鮮大学）
③	教職希望学生における保健体育科「模擬授業」を通しての経験と学び（九州共立大学・朝鮮大学）
④	児童の運動能力に及ぼす生活習慣について（九州共立・朝鮮大学）
⑤	教員養成課程のダンス授業における技能評価力育成に向けての取組（2）－ダンスの技能評価観点の可視化教材の効果的な活用方法について－（九州共立大学・朝鮮大学）
⑥	幼児の主体性と想像力を育む表現遊び Expressive play that fosters the subjectivity and imagination of infants（九州共立大学・朝鮮大学）
⑦	小学生の生活習慣や運動能力との関係 Relationship with the Life Habits and Motor Ability of Elementary School Students（九州共立大学・朝鮮大学）
⑧	身体動作と左右の考察 Body Movement and Left and Right Considerations（九州共立大学・朝鮮大学）

教員による学会参加



Fig3. 教員による学会参加様子

3) 日・韓スポーツ交流大会

日・韓スポーツ交流大会は、事前に日・韓の学生が種目を決め、お互いに準備の時間を設ける。スポーツ大会は日・韓戦を基本とし、対決をする。人数、場所

など状況に応じて日韓戦、または学年別対決にすることもある。参考に受入れ交流会の際には、バドミントン、バレーボール、サッカー、ティーボールなどを実施した。〈Fig4〉は、日韓スポーツ大会の様子である。



Fig4. 学生によるスポーツ交流大会の様子

2. 日韓国際交流参加学生によるアンケート調査結果

1) 日本の学生におけるスポーツ国際交流についてのアンケート調査結果

2019年度実施された日韓国際交流に参加した日本と韓国の学生(受け入れ, 派遣共に参加者 日本: 24, 韓国: 24)を対象に①国際交流参加の効果, ②受け入れ開催の際, 困ったこと, ③派遣参加の際, 困ったこと, ④国際交流での期待(希望), ⑤今後の課題

の5つの項目でアンケート調査を実施した結果は、〈Table3〉のようである。

Table 5. 国際交流についての認識調査結果 (n/48) (受け入れ, 派遣共に参加者 日本:24, 韓国:24)

① 国際交流参加の効果 (学んだこと, 得られたこと)	
日本	<ul style="list-style-type: none"> • 言葉の違い (勉強の必要さ) (12) • <u>異国の文化についての理解, 経験の重要さの確認</u> (24) • 国際感覚の習得, 視野の拡大 (18) • コミュニケーション能力獲得, 友人ができた (6) • 可能性の認識, 積極性向上 (8)
韓国	<ul style="list-style-type: none"> • 異国の文化についての理解 (24) • <u>友達が増えた (国内・外)</u> (24) • 外国語を習得 (10) • コミュニケーションに自信がついた (10) • 国際感覚の習得, 視野の拡大 (8)
② 受け入れ開催の際, 困ったこと	
日本	<ul style="list-style-type: none"> • <u>言葉通じない, 説明ができない</u> (22) • 文化の違い, 相手の理解不足 (10) • 準備不足, (物理的, 環境的) (12)
韓国	<ul style="list-style-type: none"> • 言葉通じない (12) • <u>準備不足 (おもてなしができなかった)</u> (14) • 相手国の文化に対する理解不足 (8) • 交流期間が短い (8) • 経験の不足, 積極性に (8)
③ 派遣参加の際, 困ったこと	
日本	<ul style="list-style-type: none"> • <u>言葉が通じない, コミュニケーション方法がわからない</u> (24) • 文化の違い, 食事に困った (12) • 準備不足, 責任もつての役割を果たすこと (10) • 臨機応変能力の必要さ (6)
韓国	<ul style="list-style-type: none"> • 交流期間が短い (6) • <u>言葉が通じない</u> (18) • 訪問国に対する理解不足 (8) • 不安, 食事が合わない (4)
④ 国際交流での期待 (希望)	
日本	<ul style="list-style-type: none"> • 友達作り (12) • 語学能力の向上, コミュニケーション能力習得 (16) • 広い視野, 国際感覚の向上 (6) • <u>異文化の理解, 多様な経験 (体験)</u> (20) • 多くのスポーツ交流大会, スポーツを通しての交流 (6)
韓国	<ul style="list-style-type: none"> • 語学能力の向上, コミュニケーション能力習得 (12) • <u>異文化 (環境・人間関係人) の理解</u> (22) • 多くの友達を作りたい (18) • スポーツ関連情報交換, 知識の確保 (10) • 国民意識の拡大, 礼儀 (マナー) など (6)
⑤ 今後の課題	
日本	<ul style="list-style-type: none"> • <u>事前に語学能力の確保, コミュニケーション方法の理解</u> (18) • 事前に相手国に対する文化, 環境についての把握 (10) • 計画的に準備に取り組む (環境, 物理的) (14) • おもてなし, 配慮 (6) • 責任化のある行動, 役割分担など (6)
韓国	<ul style="list-style-type: none"> • <u>事前に語学能力の確保</u> (18) • 事前に相手国に対する文化・環境の理解 (10) • 交流期間を延ばす (経済的, 時間的問題の解決) (8) • プログラムの開発, 計画的な準備 (16) • 参加者を増やす (4)

< Table5 > から確認できたように, '① 国際交流参加の効果 (学んだこと, 得られたこと)' で, 日本の学生は, 「異国の文化についての理解, 経験の重要さの確認」と答えたのは24名で一番多かった. また, 韓国の学生の答えでも「異国の文化についての理解」

24名と「友達が増えた (国内・外)」で24名が答え, 調査対象すべての人が国際交流経験の中で開いて国の文化について理解し, 特に韓国の学生は其中で多くの友たちを作ることができた. このことから両国の学生共に国際交流を通して得られたこと「異国に対して

の文化の理解」が一番の効果として認識していることが分かった。

‘② 受け入れ開催の際、困ったこと’では、日本の学生は、「言葉通じない、説明ができない」で22名、ほとんどの学生が「言葉が通じなかった」ことに不便を感じ、韓国の学生は、「準備不足（おもてなしができなかった）」で14名、半分以上の学生が自校での開催の際に訪問してくれた相手学生たちにおもてなしができなかったことに罪悪感を感じていることが分かった。また、韓国の学生で12人の学生も言葉が通じないことに困っていたと答え、外国との交流で‘意思疎通’言語の大事さについて考えさせられるきっかけになったと思う。

‘③ 派遣参加の際、困ったこと’では、「言葉が通じない、コミュニケーション方法がわからない」と日本（24名）、韓国の学生（18名）共に、「意思疎通’が一番困っていたことが分かった。

‘④ 国際交流での期待（希望）’では、日本の学生は、「異文化の理解、多様な経験（体験）」20名、韓国の学生、「異文化（環境・人間関係）の理解」22名が答え、両国の殆どの学生が国際交流に期待していることは、多様な相手国の文化に触れ、多くの人に出会い、交流をしながら理解していく、進んでは視野を広げ、国際感覚を身につけることを期待していることがうかがわれた。

‘⑤ 今後の課題’では、日本の学生、「事前に語学能力の確保、コミュニケーション方法の理解」18名と「計画的に準備に取り組む（環境、物理的）」14名、韓国の学生も、「事前に語学能力の確保」18名と「プログラムの開発、計画的な準備」16名で、両国の殆どの学生が成功的な国際交流にするためには、事前に相手国の言葉を勉強し、コミュニケーションが取れるようにしておくこと、次には、多様な活動ができるようにプログラムを開発するなど計画的に準備をし、より充実した交流会にしたいとの願いを持っていることが分かった。

IV. まとめ

グローバルかが急速に進んでいる現在、わが大学でも、21世紀グローバル社会に対応できる人材の養成と強化のために国境を越え、外国との交流の必要性と効果について認識し、早くから周辺国であるアジア圏の韓国・中国をはじめ、数多くの海外の大学と協定締結を結んでいる。しかし、実際の国際交流状況や実績

から見ると十分な成果が得られた（日韓の協定大学間の交流の状況から）とは言えない状況であった。そこで、海外の大学と協定締結をした当初の意図や目的であった、教員間共同研究や学術セミナーはもちろん、学生同士の学術・スポーツ交流を活性化させるために、本研究では3つの目的（①海外協定大学の教員間共同研究及び学術セミナーの開催（教員間共同研究活性化）、②日・韓学生同士の学術セミナー及び運動部同士の親善交流拡大（学生同士の交流の活性化）、③海外友好大学間協定拡大（日・韓協定校の拡大））を設定し、実際に日・韓大学間国際交流を実施した。

その結果、本大学と協定締結している韓国大邱大学をはじめ、2018年度1年間4つの大学と6回もの日・韓大学間国際交流が実現できた。国際交流では、当初の目的であった、教員間の共同研究や学生間の学術セミナーはもちろん、運動部同士の親睦交流などがすべて実現できた。3つ目の目的であった協定校の拡大はまだ実現できていないが、昨年、国際交流を実施した非協定校（3大学）とは、現在進行形で国際交流、共同研究を進めているので、より多くの学生たちが自由に国際交流に参加し、より多くの経験ができるように両大学の状況を見払いながら近いうちに協定まで結べるように勧めて行きたい。

本国際交流活動での一番の成果としては、参加した学生たちが国際交流を通して、異国の文化について理解するようになり、グローバル化のためには言葉の違いを克服しなければならないことに気づいたこと、また、国際感覚の習得や視野の拡大、それに外国の友人を作り、彼らとのコミュニケーション能力まで獲得できたことである。また何よりも嬉しいことは、学生達が‘経験の重要さ’や‘可能性’の認識し、より積極的に行動するようになったと答えたことである。我々が2018年度に実施した日・韓大学間国際交流は、日本と韓国のスポーツ系の学生および教員が中心になって企画、運営、進行されてきた経緯がある。同年代であり、同専門分野を専攻している学生たちにとっては、共通するものが多く、共感することも多かったからこそ学びも多かったと思う。

「一事を経れば一智に長ぜず」の意味からすると今回の国際交流活動は大いに成功的な交流会だったといえよう！

V. 今後の課題について

国際交流に参加した学生たちからの意見や企画・運

営してきた研究者として国際交流を運営していくうえで困ったことや気づいたことを中心に今後に課題を挙げてみる。

一つ目、せっかくの国際交流での効果とお互いの国の言葉の理解力は絶対的比例関係にあると思う。Cogan (2000)³⁾、OECD (2006)⁵⁾からも強調した21世紀に必要とされる能力の一つである、「ツールを相互作用的に活用する能力」ここでのツールには人間同士のコミュニケーションに欠かせない道具である「言葉」も含まれているので、事前に国際交流を実施する予定がある国の言葉を勉強しておく。勉強会ややる気支援の時間をもっと積極的に運営する必要がある^{3),5)}。

二つ目は、人間は、「何でもは知らない。知っていることだけ、知っている。また、知っているだけ見える。」のであろう！そのため、事前に 異国の文化や歴史、また、その裏の隠れている背景にまで知識を身に着けてこと。そうすることによって、実際に交流に参加し、いろいろなことを経験していく内にもっと知識が広がれば、世界が広がり、物事についての見方が大きく変わり、果てには人生まで変わる。様々な経験を通して学んだ知識、問題解決能力は、その後を生じる問題を解決するのに重要な作用をする (Miller (1991)⁴⁾。

最後に、今後は大学規模で、より多くの学生が気軽に参加し、多様な経験ができる交流会の企画・支援・運営ができたと思う。国際交流に参加したくても、経済的に厳しい学生も安い金額で参加できるように奨学金制度や助成金制度を作り、もっと多くの学生が参加し、その中で多くの経験ができる環境を作っていきたい。

参考文献

- 1) 黒川清(2011).「若い人には外を見せなさい！」レジデントノート4(11). 東京: 羊土社.
- 2) スポーツ庁(2019). 国際交流・国際協力 > スポーツに係る国際動向. http://www.mext.go.jp/sports/b_menu/sports/mcatetop08/list/1372049.htm
- 3) Cogan, J, J(2000).Citizenship for the 21st century: an international perspective on education. Korea Page.
- 4) Miller. J(1991)."Four-H and non-4H participants' development of competency, coping, and contributory life skills "doctorial

dissertation(Ph. D) Iowa Sate University
5) OECD(2006). Start strong II: Early childhood Education and care. France Paris : OECD

付記

本稿は、2018年九州共立大学特別教育研究費（プロジェクト名：海外協定大学教員／学生間共同研究及び国際交流の活性化方案の模索—海外協定大学間交流を通して— 研究体表者：鄭 英美）の一部助成を受けて行った交流活動の結果に基づいて作成したものである。

Received date 2019年7月25日

Accepted date 2019年7月31日